



淡路の未来を生きる

AWAJI未来探検隊

～里山と竹編～

事業報告

- 1 概要 平成27年度から続く事業「AWAJI未来探検隊」は昨年度からリニューアルした。SDGs・ESDの観点を盛り込み、5年間で淡路島の里山、里、里海をフィールドにストーリー性をもって展開していく。今回は、昨年度のテーマ「野生生物との共存編」に続き、里山に焦点を当て、「放置竹林」をテーマに実施した。野生生物が棲む山、特に竹林の現状と要因をつきとめるため、一日目は、専門家と実際に地域にある竹林を訪れ、放置された竹林の状態を観察した。二日目は、管理された里山を見学するとともに、竹林から竹を自ら切り出し、竹製品作りを行った。その後、様々な立場の方との対話やリアルな体験を通して、学んだことや感じたことを1分間のメッセージ動画にまとめた。

2 日時 (第一回) 令和4年 9月17日(土) 10:00～ 9月18日(日) 16:00

(第二回) 令和4年10月29日(土) 10:00～16:15

3 場所 (第一回) 国立淡路青少年交流の家、阿万西町周辺、安乎地区周辺

(第二回) 国立淡路青少年交流の家

4 参加者 (第一回) 参加者18名(小学生8名、中学生8名、高校生2名)

(第二回) 参加者14名(小学生6名、中学生6名、高校生2名)

5 講師 (第一回) NPO法人ソーシャルデザインセンター淡路 内藤 正明 氏

淡路景観園芸学校 藤原 道郎 氏

Hikobae Works 新庄 道 氏

淡路里山を未来につなぐ会 辻 淳三 氏

(第二回) 株式会社フィールドコム 温泉 銀次 氏、伊那岡 智也 氏

NPO法人ソーシャルデザインセンター淡路 内藤 正明 氏

6 プログラムの日程

※9月19日(月・祝)の台風14号の影響により、当初の2泊3日の予定から1泊2日に短縮し、別日に日帰りを実施した。

【第一回】9月17日(土)～18日(日) 1泊2日

	9:30	10:00	12:00	13:30	17:30	18:15	19:00	21:00	21:30
9月17日(土)	受付	<開会> <去年の活動を知ろう!> ・昨年度の事業で作成した動画を視聴した。 <アイスブレイク>	昼食	<淡路の竹を知ろう!> 淡路景観園芸学校の藤原先生より、竹の由来や生態について、ポジティブ・ネガティブ面等を実際に竹林を見学しながら学んだ。	入浴	夕食	<自分たちができることを考えよう!> 竹製品はどんなものがあるか、作る過程等を考えた。	就寝準備	就寝
9月18日(日)	起床	朝食	掃除・移動	<自分たちができることをやろう!> 安乎地区の里山を訪れ、林業に従事されている新庄氏と里山保全を行っている辻氏の指導のもと、管理されている里山を五感を使って見学した。また、枯れ木の伐倒も見学した。最後に自ら竹を切り出し、竹製品を制作した。	移動	<二日間を振り返ろう!> 里山の保全と野生生物の共存の関係を講師柴田氏とともに考えた。		解散	

【第二回】10月29日（土）日帰り

	9:30	10:00	12:30	13:00	15:00	16:00	16:15
10月29日（土）		受 付	＜再開の会＞ ＜未来図AWAJIを描こう！＞ 自分の考えや思いをまとめ、班で1つのメッセージ動画を制作した。	昼 食	＜未来図AWAJIを描こう！＞ 動画制作の続き 動画の試写会を行った。	＜まとめ＞ 「豊かな自然について」再度考える。 自然循環について考える。	＜閉会＞

7 プログラムの詳細

第一回—1日目—

【開会・去年の活動を知ろう！】（交流の家）

- ・今年度のテーマである「放置竹林」は、昨年度のテーマである「野生生物との共存編」に連環しており、開会式の中で昨年度参加者が作成したメッセージ動画を用いて、昨年度からの学びのつながりをイメージできるようにした。
- ・なぜ野生生物が里に下りてきているのか、里山に起きている現状と原因を明らかにすることを探検隊のミッションに据える旨説明をした。以下の2つが探検隊のミッションである。

1. このようなことにどうしてなってしまったのかをつきとめろ！

このようなこと⇒今はどのような状況？

どうして⇒原因は？

2. 淡路島の未来のために何ができるのかを考えよ！

- ・探検隊のミッション「2.」は「地域への発信」として掲げ、動画を制作するための素材（写真や動画等）を収集するため、各班でiPadを使うことや、聞いたこと、感じたことを記録することを説明した。



【一緒に過ごす仲間を知ろう！】（交流の家）

- ・参加者の多くは昨年度も参加した人であり、初めての参加者との温度差があった。また、今年度は小学生から高校生まで縦割りの班編成を行ったため、一緒に活動する班のメンバーとの関係を構築するためでなく、緊張を解きほぐすためにしっかりとアイスブレイクをする時間を確保した。



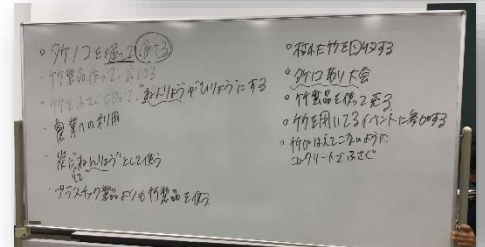
【活動①～淡路の竹を知ろう！～】（交流の家、阿万西町周辺）

- ・講師の藤原氏から、竹や竹林の特徴について、実物の地下茎等を提示しながら説明をしていただいた。淡路島の地図から竹林の分布を見て、「こんなに竹林が広がっているのだ」と驚く参加者もいた。管理されていない竹林が増えて困ること（ネガティブな面）だけではなく、活用できること（ポジティブな面）もお話いただき、竹製品のかごやおもちや、燃料等を実際に触りながら学んだ。
- ・その後、藤原氏と一緒に、施設近隣の集落にある竹林を訪れた。この竹林は、持ち主がほとんど管理することができず、荒れた状態となっていた。さらに当日は雨が降っていたため、竹林の中は地面がぬかるんでおり、十分気を付けて入るよう注意喚起を行い、隊列を組んで入山した。参加者は講師の説明を聞きながら新しい竹と古い竹を触ったり、色を見たり、上を見上げ竹の成長を感じたり、下を見て根の広がりや歩きにくさを感じたり、様々な視点、角度から観察していた。特に、地下茎を実際に掘り起こして観察した際、広範囲に根が広がっていること、このまま広がり続けると建物に迫っていくことに驚き、竹林に起因する被害を実感しているようだった。



【活動②～自分たちができることを考えよう～】（交流の家）

- ・午後の活動をふりかえり、以下のテーマの順に班で話し合うグループ活動を行った。
 - ①自分たちでできることは何か。
 - ②自分たちの生活の中で、竹の物はどんな物か。
 - ③竹の製品ができるまでにどんな作業工程があるか。
 - ④明日作る竹の製品は。
- ・①の「自分たちでできることは何か」では、「タケノコを食べる」や「竹製品を作って広める」、「燃料や肥料にする」、「竹のイベントを行う」等様々な意見が出た。各テーマを総じて、班での意見交換や全体での意見交換を通して、「その意見があったか!」と参加者自身の経験や知識と照らし合わせながら、新しい視点、知見を得ることができていた。また、班を縦割りにしていたことで、年長者の意見を興味深そうに聞く小学生の姿も見られた。



第一回—2日目—

【活動③～自分たちができることをやろう!】（安乎地区）

- ・2日目は、施設の隣の町にある安乎地区（山間部）に朝から移動した。ここでは、里山の保全を目的に管理した山林があり、そこをフィールドに講師の新庄氏と辻氏から、まずは「山と里山」について話を伺った。目の前にある里山と1日目に見学した「管理されていない」竹林を比較すると、まず参加者から「風が通っている」という意見があった。その他に、「地面は足場が広く歩きやすい」や「光がある」（雨天と晴天との違いではなく）といった意見もみられ、里山にいる気持ちよさを感じていたように見受けられた。また、大きな樹木が立ち並ぶ箇所と小木が生えている箇所とを比較し、長い年月をかけて森（自然）が循環していることを学んだ。その中には、竹の侵食が垣間見えるところもあり、講師の方から日々竹を伐採し続けて侵食を防いでいる苦勞を聞いた。
- ・樹木の中に、虫に侵され枯れている木があり、新庄氏がその木を伐倒するところを見せていただいた。チェーンソーの迫力等もあり、その様子を iPad を使って熱心に撮影する姿や瞬きもせず、息をのんで見守る参加者の姿が見られた。伐倒した後は、切り株に参加者は集まり、木目を数えたり、切り口の匂いを嗅いだりしていた。
- ・竹の侵食を防ぐお手伝いとして、参加者は自分たちで里山に生える竹をのこぎりで切り出した。切る方向や気を付けること等の講師の助言をもとに、製品に加工するのに適したサイズの竹を探しながら10本ほど切り出すことができた。のこぎりを初めて使うため上手くいかない参加者にアドバイスをしている姿や、重い竹を協働して運び出す参加者の姿が見られた。
- ・自分たちで切り出した竹を使って、1日目に考えていた「竹製品」づくりを行った。小刀や彫刻刀の使い方をレクチャーし、滑り止めのついた軍手を必ず着用して行うことを注意した。鉋やノミは講師が使用することとした。講師やスタッフの手を借りながら、イメージしていた物を作り上げていた。使う人のことを考えながら加工する姿等がみられ、プランターや箸、弓矢等様々な物が完成した。



第二回

【活動①～再開の会～】（交流の家）

- ・第一回のプログラムを写真のスライドを用いて確認しあう中で、学んだことや感じたことをふりかえった。「里山

は守らなければならないと思うか」という問いに対しては全会一致で「そう思う」と答えた。また、放置された竹林と管理された里山の違いについて、改めて思い出す機会を作り、グループで出し合った。そこには、「風が通る」や「歩きやすい」、「竹が密になっていない」、「色が違う（緑色と茶色、つやがある）」等の意見があり、改めて「放置竹林」に対して自分たちがすべきことを思い出した。

【活動②～未来図 AWAJI を発信しよう！～】（交流の家）

- ・動画の制作において、伝える対象は「保護者世代」とし、1分間を目安とした動画を制作することとした。制作には、株式会社フィールドコム温泉氏、伊名岡氏の2名から見本となる動画を紹介していただいたり、制作には「起承転結」が必要であること、制作アプリの使い方等を学んだ。その後は、各班を巡回しながら、細かい指導・サポートを行っていただいた。
 - ・動画の制作に向けて、まず何をメッセージとして伝えたいのか、メインとなるテーマを班で話し合った。1班は「2つの竹林」、2班は「放置竹林とは」、3班は「竹製品を使おう」に決定した。各班では、動画に込めたいメッセージを一つに絞ったり、どのような文章（一つひとつのメッセージ）にするのかを考えることに難航していた。制作には10コマを目安とした台本に落とし込む班もいれば、そのままそのメッセージやキーワードに合う素材（写真や動画）を選ぶ班もみられた。台本に落とし込まずに、メインとなるメッセージを念頭に、写真や動画を組み合わせながら、巧みに編集する姿が印象的だった。
 - ・動画の制作では、前回の参加者や普段 iPad を使い慣れている参加者を中心に、写真を選択する人や文章を整える人、音楽を選ぶ人、音声の原稿を考える人など役割分担を行いスムーズに行っていた。
- 班の中では、「目の見えない人のためにも、音声を入れたい」といった意見や、「この色よりもこっちの方が見やすい」や「この大きさにした方がわかりやすい」といった意見があり、「伝える」ことに対して様々な視点で考えて制作する姿がみられた。



【活動③～AWAJI 未来探検隊のふりかえり～】（交流の家）

- ・最後のふりかえりでは、「里山を守る必要はあるのか」という問いに対して、全員が「守る必要がある」と答え、里山を管理していくために自分たちにもできることがあることを再確認した。
- ・また、講師の内藤氏とオンラインでまとめを行う中で、放置竹林等の問題は喫緊の課題であり、里山を保全することは自然循環において里や里海の保全にもつながること、石油時代において地下資源がなくなりつつある今、竹等の資源を有効に活用するしくみが必要であることについて再度考える機会があった。例えば、プラスチックの容器ではなく、竹製品を使おうという考えもその一つである話があった。事業の中で、自分たちができることを考え、他者へ向けたメッセージが、改めてどういう意味を持っているのか、淡路島の自然、ひいては地球にとってどれほど重要なものであるかを参加者は再認識したようだった。
- ・当事業の企画委員長である認定 NPO 法人ソーシャルデザインセンター淡路の木田氏から、「淡路島は昔水不足で悩まされていたため、山の保水機能は重要であり、ダム等ができていますが、里山をしっかりと管理しながら、山の養分を里や海へつなげることも考えなければならない」、と今後の淡路島を生きる参加者へエールが送られた。



8 各班が制作したメッセージ動画

- ・各班が制作した動画は、南あわじ市のケーブルテレビでニュース番組として放映される他、年間を通して、CM として定期的に放映される予定である。その他、当施設の YouTube チャンネルにおいて、アップロードしている（下の QR コードは当 Youtube チャンネルのサイト <https://www.youtube.com/@user-fk6iv8qi2p>）。

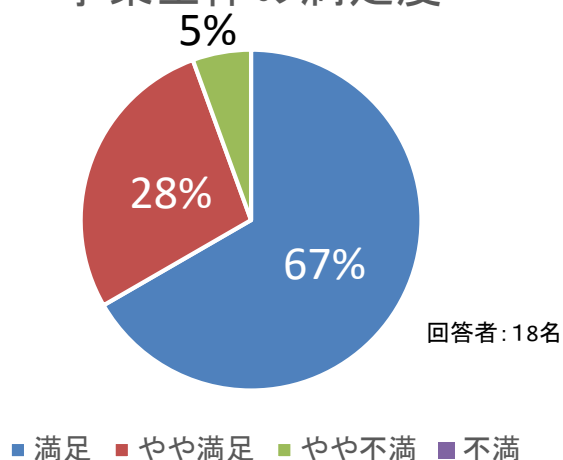
＜ 各班のメッセージ動画 QR コード ＞



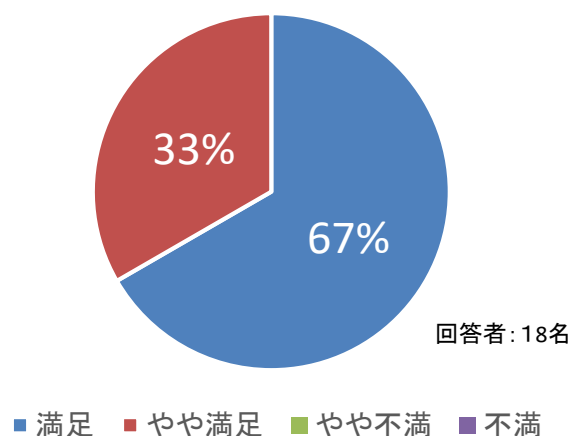
9 事業の成果～参加者アンケートより～

(新たに知ったことや気付いたこと) ・今、淡路島の竹林がとても大変なこと。 ・竹は加工しやすく、いろんな物を作れることに気付いたので、生活の中でのいろんな物に代用できそうと思った。 ・竹には良いところばかりあると思っていたけど実際は悪いところもたくさんあるとわかった。	(将来、淡路島の環境はどうなると思ったか) ・誰も管理していない竹林が増えていったら、他の植物も枯れて、家とかの敷地にもはえてきたりするので、大変なことになると思う。 ・これを知った人はもっと自然について学んで、環境が良くなっていくと思う。
(将来、あなたは淡路島の環境をどうしていきたいと思うか) ・きちんと管理された竹林や里山が広がる淡路島。 ・今回のプログラムに参加して知ったことを発信して、他の人たちに知ってもらい、竹林をほどほどに減らしていきたい。 ・枯れた竹をとるボランティアなどに参加したりして、頑張っている人たちに協力したい。 ・自然を活用したものを利用して環境問題を減らしたいと思う。	

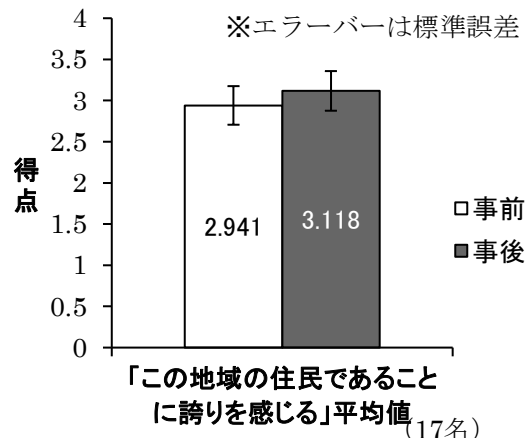
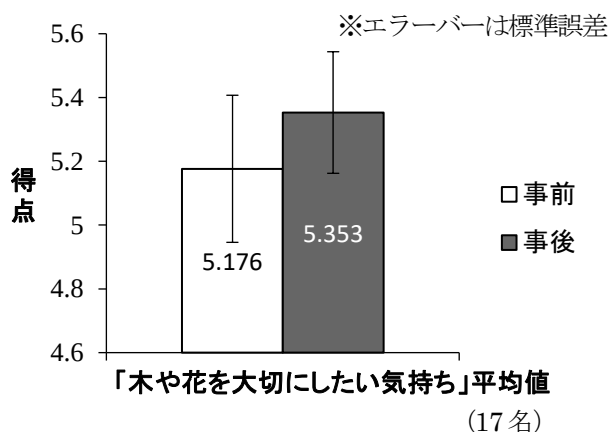
事業全体の満足度



事業の活動内容の満足度



- ・参加者の事業前後における「環境保全に対する意識」や「地域への愛着に対する意識」の変化を調査し、以下のような結果が得られた。「木や花を大切にしたい気持ち」の質問項目（1～6点評価）に対して、事業前では平均 5.176 得点だったのが、事業直後では平均 5.353 得点となり、約 0.2 得点の向上がみられた（有意差はない）。また、「この地域の住民であることに誇りを感じる」の質問項目（1～4点評価）に対して、事業前では平均 2.941 得点だったのが、事業後では平均 3.118 得点となり、約 0.2 得点の向上がみられた（有意差はない）。
- ※いずれも全 18 名の参加者のうち、1 名は調査協力の同意を得られなかったため調査対象は 17 名となった。
- この調査から、本事業を通して、参加者は「環境保全に対する意識」や「地域への愛着」心が高まったことがわかる。



10 事業の成果と課題～担当者の所感より～

●成果

参加者は普段竹林が家の周りには知っているが、管理できていないことや管理していないことにより自然（山）や私たちの暮らしに多大な影響を及ぼしていることを知らない人がほとんどだった。今回、竹林の現状や放置竹林が及ぼす影響について専門家から教えてもらい、「どうにかしなければならぬ」と実感している様子だった。竹の生態を学ぶことで、よりその重大さも気付くきっかけとなった。「自分たちができること」を考える時間では、「たけのこ掘り大会に参加する」や「竹製品を使って広める」等奇策で面白い意見が多くみられた。

また、小学生から中学生が混合する縦割りに班を編成したことにより、上級生の意見を参考にする小学生や小学生から意見を引き出す上級生の姿がみられ、班のディスカッションが活発であった。

「野生生物との共存編」がテーマであった昨年度の事業と今年度の事業に連続して参加した人は、なぜ野生生物が里に下りてくるのか、その理由を山の管理不足や放置した竹林になぞり、つながりを改めて実感する事業となった。里山を保全することが、私たちの暮らしがある「里」だけでなく、海（里海）にも連環して影響があることを理解している様子であった。

●課題

今回は2泊3日で事業を計画していたが、季節柄か台風の影響を受けたため、1泊2日及び1か月後の日帰りと日程を変更した。そのため、参加者の学びが一時中断されてしまい、日帰りのプログラムの進行が滞る場面がみられた。また、動画の制作について、シナリオ（台本）を作成する工程に多くの時間を費やしてしまい、その後の進行に影響があった。

当事業は、テーマに応じた季節を考慮するとともに、自然体験活動プログラムの確保と一貫した学びができる事業日程を立てる必要がある。

環境教育を目的とする事業では、いかに子供たちが「自分事として」「一般的な考えではなく、自分の考えを持てるか」が焦点であると感じた。今後、「リアル」な体験（見て、聞いて等五感を使った体験）を通して学んだことを大事にする事業を展開していきたい。

主 催 独立行政法人 国立青少年教育振興機構 国立淡路青少年交流の家
〒656-0543 兵庫県南あわじ市阿万塩屋町 757-39
TEL 0799-55-2696 FAX 0799-55-0463
<https://awaji.niye.go.jp/>

